東京学芸大学　令和７年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	感性と多様性が拓く学び ～ 創発が生まれる“場”の探究～	
氏名 齋藤真智子	所属 教育インキュベーション推進機構	職名 助教

APRIN e-ラーニングプログラムの受講　☑←受講済の場合はチェックをすること

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

近年、「探究学習」「STEAM 教育」「アート教育」「越境学習」などが教育や人材育成の現場で注目されている。これらの動向は、既存の知識や技術を習得する学びのあり方のみならず、人間各々がもつ「感性」や、様々な人・モノなどが交差する「多様性」からの学びのあり方への期待感の表れであると考える。そして、そのような場では、相互作用によって新しい価値が生み出される「創発」が期待され、あるいは自然発生的に生じている。本研究では、感性や多様性を尊重することによって既存の範疇に留まらない新たな創発が生じると仮定し、《日常的》に創発が生じている場（子どもの居場所、オルタナティブ教育の現場等）への関与的な調査を通し、創発における学び（自己変容）の教育的・社会的意義を明らかにすることを目的とした。また、創発が生じる場を《意図的》につくる際に、感性と多様性を最大限拓くための手法として有効だと思われる、アート教育や人類学的要素を取り入れたプログラム開発・検証を行なうことで、教育や人材育成の現場に有用な知見を見出すことを目的とした。

ここでは第２の目的であった、創発が生じる場を《意図的》につくり出したプロジェクトの２つの報告をする。

◆たまりば・子ども未来舎「りぜむ」との共創｜「潟上 手ずから展」

「りぜむ」は新潟の佐渡島にある、空き家を利用して地域の子どもからお年寄りまで集まることができる場をつくっている団体である。昨年から筆者も「りぜむ」で年に１度開催される、お祭りに関わらせていただいており、今年はりぜむの一角にある和室で地域の方が日常的に創作している作品を展示する展覧会を企画した。展示の際は、出品者や学生の感性が最大限発揮されるよう設計した。具体的には、①作品の配置を出品者自身に考えてもらうこと、②学生が作品にまつわることを出品者にインタビューし、その要約を作品タイトルとともに記載したキャプションを制作するなどである。①に関してはりぜむや家にあるものを動員してよりよく作品を見せていく創発が生じ、②に関してはキャプションを通して、出品者の知られざる姿や想いに鑑賞者が触れる機会が生み出された。そこでは地域の人の多様な実践がつながりあっていく様子、学生自身にも多くの学びが見受けられた。本プロジェクトの詳細は報告書にまとめているが、各個人がもつ「感性」や、様々な人・モノなどが交差する「多様性」を尊重する場をつくり出すことで、「学び」そのものも多様に生じていただけでなく、その地域で新たな関係性が紡ぎ出されることも見出された。

◆隠岐島前教育魅力化プロジェクトとの共創｜「中学生アーバン探究」

「アーバン探究」は島根県隠岐島の中学生が東京に１週間暮らしながら東京を探究するプログラムである。筆者はフィールドワーク後の振り返りの時間を担当した。振り返りというと言語化することが一般的ではあるが、その前段として東京で感じたことを色や形などで表現していくアートの手法を活用した。「東京の断片コレクション」と題して、自分にしか感じられていないであろう東京を、A3 の紙に写真やクレヨン、ビーズ等の素材を使って表現してもらった。

最終日には一般・保護者向けに渋谷で報告会があり、「東京×〇〇」というテーマで各自報告を行ったが、前日のアートワークでの振り返りがあることによって、より発散的に振り返りができたという声が引率者からあがっていた。また、言語情報だけではなく、アートとして表出した作品があることによって報告を聞いている人にも、より個々人が学び取った/感じ取ったことを共有できる様子が見受けられた。フィールドワークでは、余白を持たせた設計により各個人の行動が多様に生じていたが、振り返りでは各自の感性を尊重した振り返りにより、言語化するだけでは掬い上げられない学びが表出することが明らかになった。

【研究成果発表方法】

「りぜむ」との共創に関しては報告書にまとめている。

小西公大・齋藤真智子(2026) kururu あるく、つながる、つくる ～潟上 手ずから展の記録～

※発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに１部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。